

文化芸術による社会包摂事業：インクルーシブアート教育によるつなぐ学びの場づくり ～アートによる「ことづくり＝ひとづくり」～

取材対応者（予定） 特色ある取組



教育学部茂木一司教授



教育学研究科 2 年竹丸草子さん

群馬大学教育学部美術教育講座は、茂木一司研究室を中心に、地域に拓かれた大学をめざし、アートによって、現代社会が抱える失われたコミュニケーションや生きづらさの解消に取り組んできました。たとえば、中之条ビエンナーレへの教育プログラム支援、アーツ前橋と連携したアートマネジメント人材育成（まえばしアートスクール計画）など。そこではアートを「生きるための身体技法」と捉えて、普段アートが行き届かない場（障害者施設、高齢者施設、経済的弱者など）に出向いてワークショップをしたり、対話を繰り返しながら、ものづくりだけではない、ことづくり＝ひとづくりを行ってきました。

アートの良さは、差異や多様性をむしろ活かし、相手を否定しないで調和をはかっていることです。つまり、アートの学びは人を選別するのではなく、一人ひとりをかけがえのない個人として尊重するゆるやかな社会基盤をつくるのです。

わたしたちは、このことを踏まえて、学修の場を大学外へ拓くことを考えました。毎年やっているさまざまなプロジェクトでは、学生が社会人といっしょに学ぶ場を提供します。大学内だけではできない、生きた学びの場の構築はリアリティの失われた現代では必須です。理論と実践が必然的に往還され、学生たちはさまざまな葛藤を経験しながら、自分の立場で何ができるのか、迷いながら困難に立ち向かいます。つまり、大学教育を社会にある問題解決の場とするのです。

○プログラムを体験して
文化庁との共同研究「文化芸術による社会包摂ガイドライン」の作成（平成 30 年度）に関わりました。特別養護老人ホームで演劇ワークショップを体験し、その後のシンポジウムで、医療福祉と芸術の越境の難しさを知りました。しかし、両者の継続的な対話こそ、明日の日本社会の礎になるはずとも思いました。

上記取組による成果・評価など

共生社会構築が理念だけでなく、群馬大学教育学部美術教育講座による実際のアートによる社会包摂活動を通して実装され、学外に多様な学びの場ができ、大学の学習が多層的になっている。特に、さまざまなアーティストとの連携は大学教育に創造性と柔軟性を与えている。プロジェクトの客観的な評価は、文化庁との共同研究や科学研究費補助金などの取得・実施が示すとおり、継続的に成果を出すことができています。また、この波及効果によって、群馬大学の地域貢献の認知度も拡張している。

※取材対応者は他に、郡司明子准教授、喜多村徹雄准教授など。

The collage features several key elements:

- こどもわーく** (Children's Workshop): A poster for a workshop for children, featuring a cat and the text 'こどもわーく' and 'まえばしアートスクール'.
- まえばしアートスクール計画** (Maebashi Art School Project): A poster with the text 'LEARN AND CONNECT WITH ART / MAEBASHI ART SCHOOL PROJECT' and 'まえばしアートスクール計画'.
- 文化芸術による社会包摂は可能か？** (Is social inclusion through culture and art possible?): A poster with the text '文化芸術による社会包摂は可能か？' and '芸術と医療・福祉の対話と越境'.
- 音でさわる、目で語る** (Touch with sound, tell with eyes): A poster with the text '音でさわる、目で語る' and 'えいめいにおける音と身体ワーク'.

参考 URL

- ・ 茂木一司研究室 HP
- ・ <http://moka7887.p2.bindsite.jp/w1docs/index.html>
- ・ <http://moka7887.p2.bindsite.jp/w1docs/pg123.html>